

A

鈴木静村書

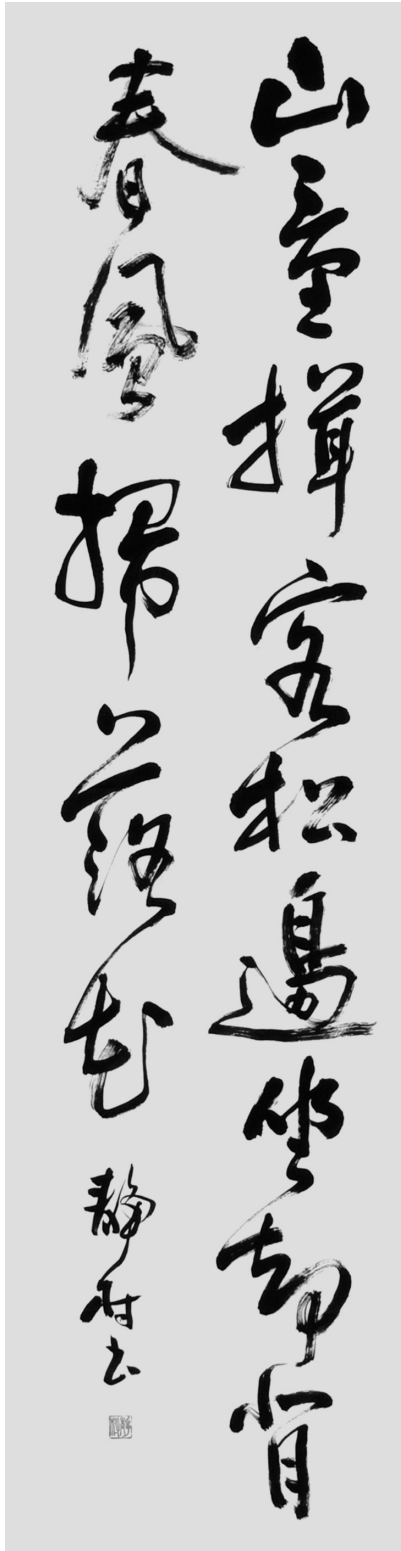
山童揖客松邊坐 却背春風掃落花 (黄鎮成)
山童客の松辺に坐するに揖し、却って春風を背にして落花を掃う。



B

学び方

A 右行八字詰め、行末の「却」の末画は全体としても中心画。B 右行九字詰め構成。「童」草体で小さく、「却背」を連綿、左行五字構成。私
は体験上、末画の夕テ画は作品面での主要ポイントとして、その効果を狙っている。特に行末の場合はより注目的。今回Aの「却」成功させ
たい末画。なお「揖、掃」の末画も萎縮することなく暢びと味を持たせたい。



学び方

童 A 行書菱形、B 草書夕テ長小さく。客 冠に相違。邊 しんにようへへの前の部分、書き方多様、字典で確かめを。却 A 末画暢びやか、
B 末画から連綿。春風 行草に拘りなく自在に。掃 B 手偏から旁へ大きく円曲線、A B 末画すっきりと。落花 B 「花」末画点への脈絡線、
生彩なく失敗。

訳：山家の童子は松林に坐っている客に挨拶し、却って春花に背を向けて落花を掃う。

予告 (四月二十二日締切)

雨過芳花潤

風來綠葉柔

研朱讀周易

更覺小牕幽

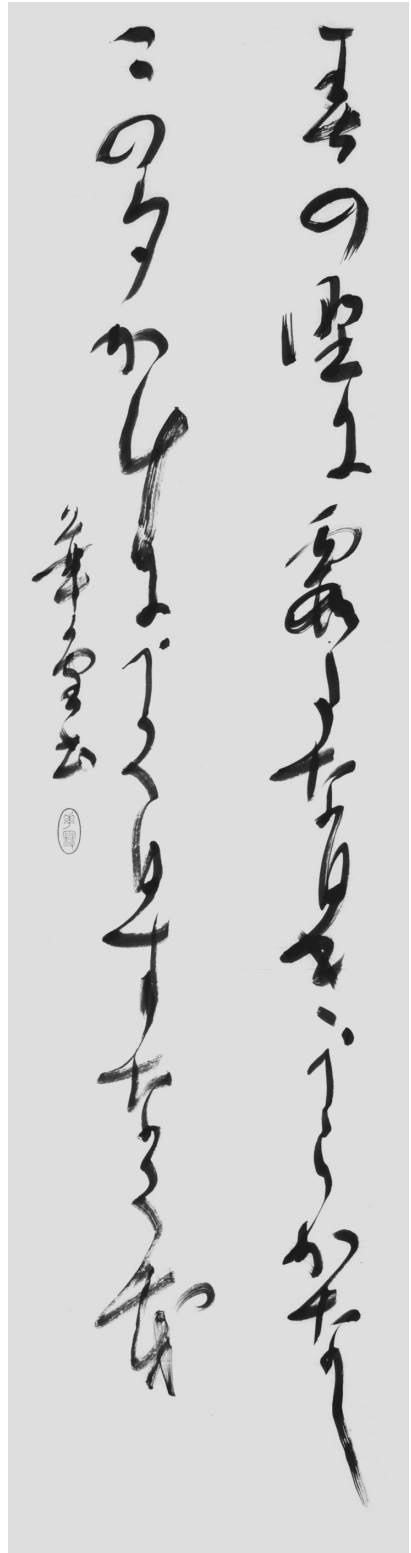
(銭鳳綸)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

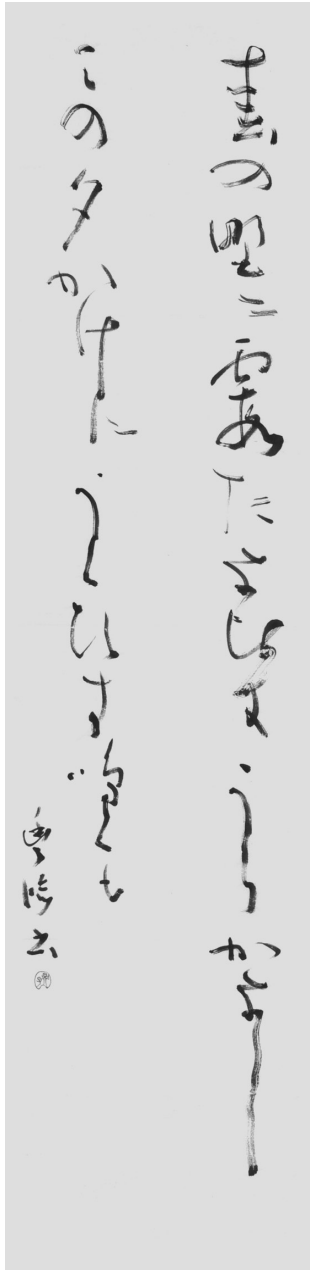
春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも (万葉集 大伴家持)
春の野に霞多な日きうらかなしこの夕かけれ久日すなく茂



B

吉原豊臨先生書

春の野に霞た奈比支うらかな奈しこの夕かけにうくひす鳴くも



学 び 方

万葉集の原本は、ご存知のように漢字で書かれています。今回の歌は、「春野尔 霞多奈昆伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母」が原文です。(岩波書店「新古典文学大系」より) 原文の字を考えて、作品の中にとどのような仮名を用いようかと考えるのもよいかと思います。華雪先生のお手本では、「尔」「多」「奈」「宇」「良」「尔」「奈」「久」が原文通りに使われ、私は「奈」「宇」「良」「久」と四文字しか使いませんでした。連綿をきかせたり、単体表現で書いたり、いろいろな工夫をして勉強してみてください。漢字を用いることもでも字幅を出すことができますが、華雪先生の一行目「多」から「奈」、二行目「日」から「す」のところは横画の手法により字幅が出て作品に別なおもしろ味が加わっていると思います。

今回の歌は卷十九の4290番ですが、4291番と対になって大伴家持が「興のままに作った歌二首」として掲載されています。「春の野に霞がかかって何となくもの悲しい。この夕暮の光の中に鶯が鳴いているよ」という歌意ですが、ほのかな景と情とが渾然とつけ合って春の夕べの哀愁を表しています。歌の意味も考えながら作品を作ってみてはいかがでしょうか。

予告

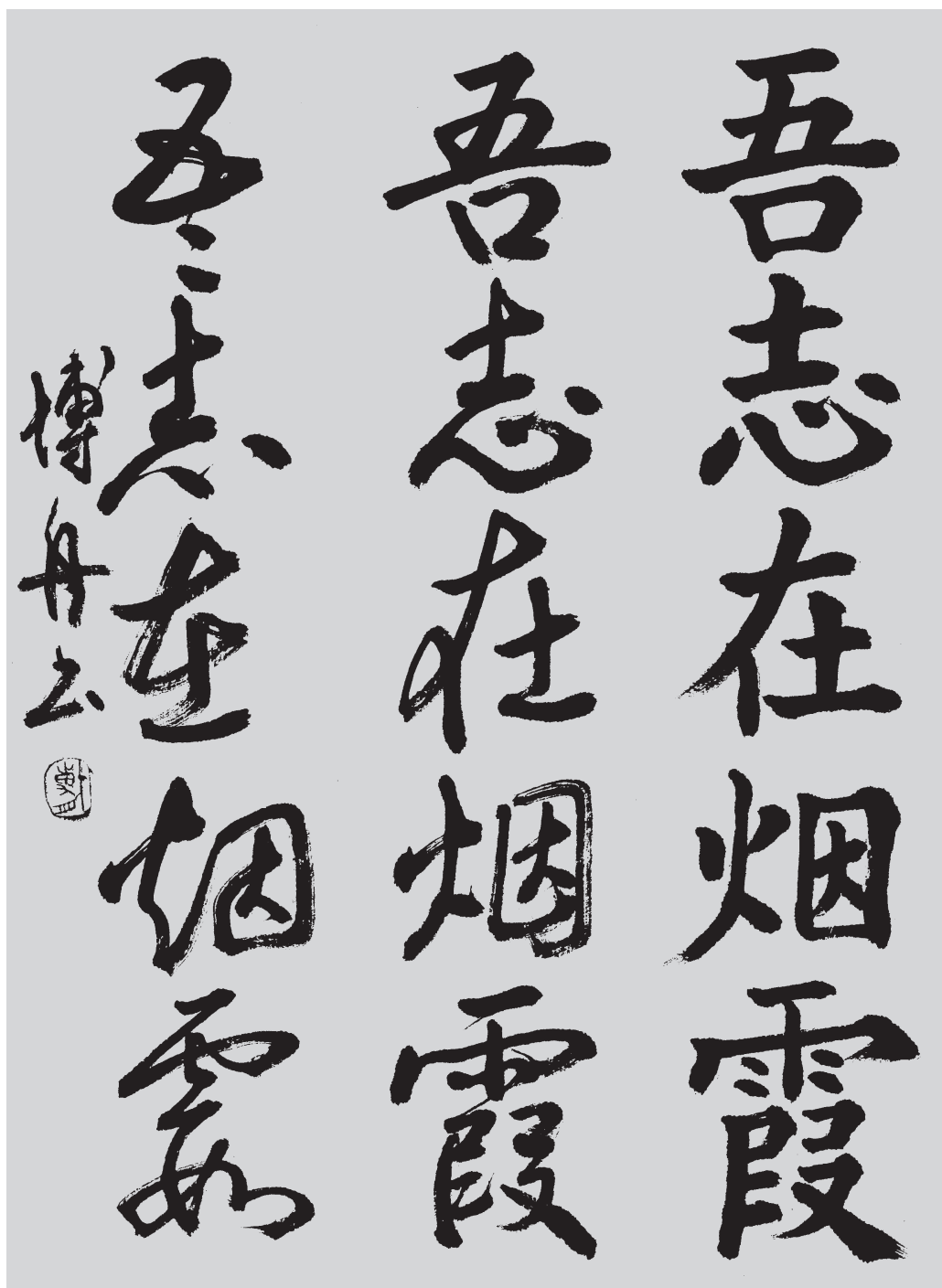
(四月二十二日締切)

吹風と谷の水としなかりせば深山がくれの花を見ましや (古今和歌集)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

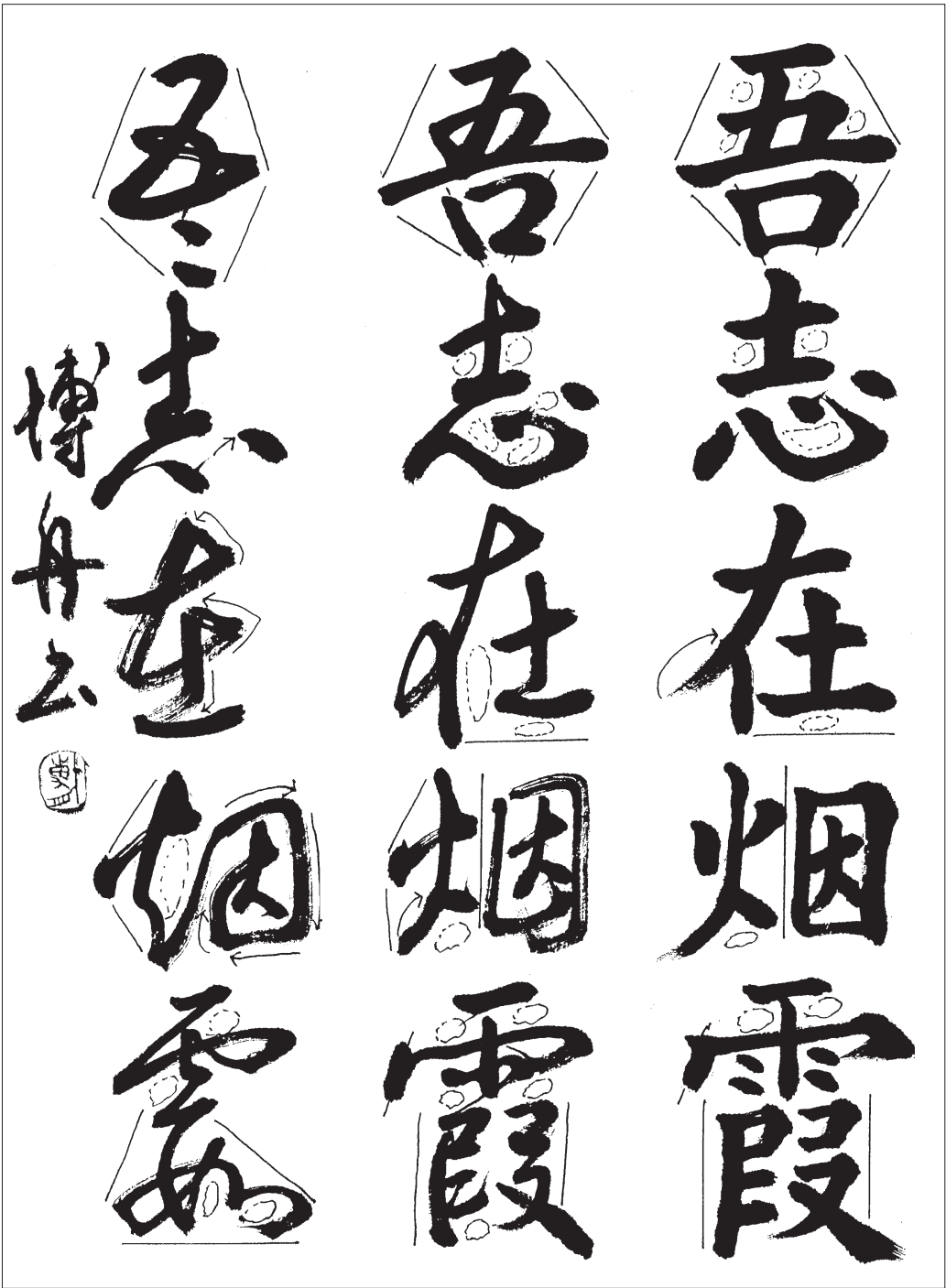
北沢博舟先生書

吾志在烟霞 (陳天錫)
わがこころはせんか
吾志 烟霞に在り。



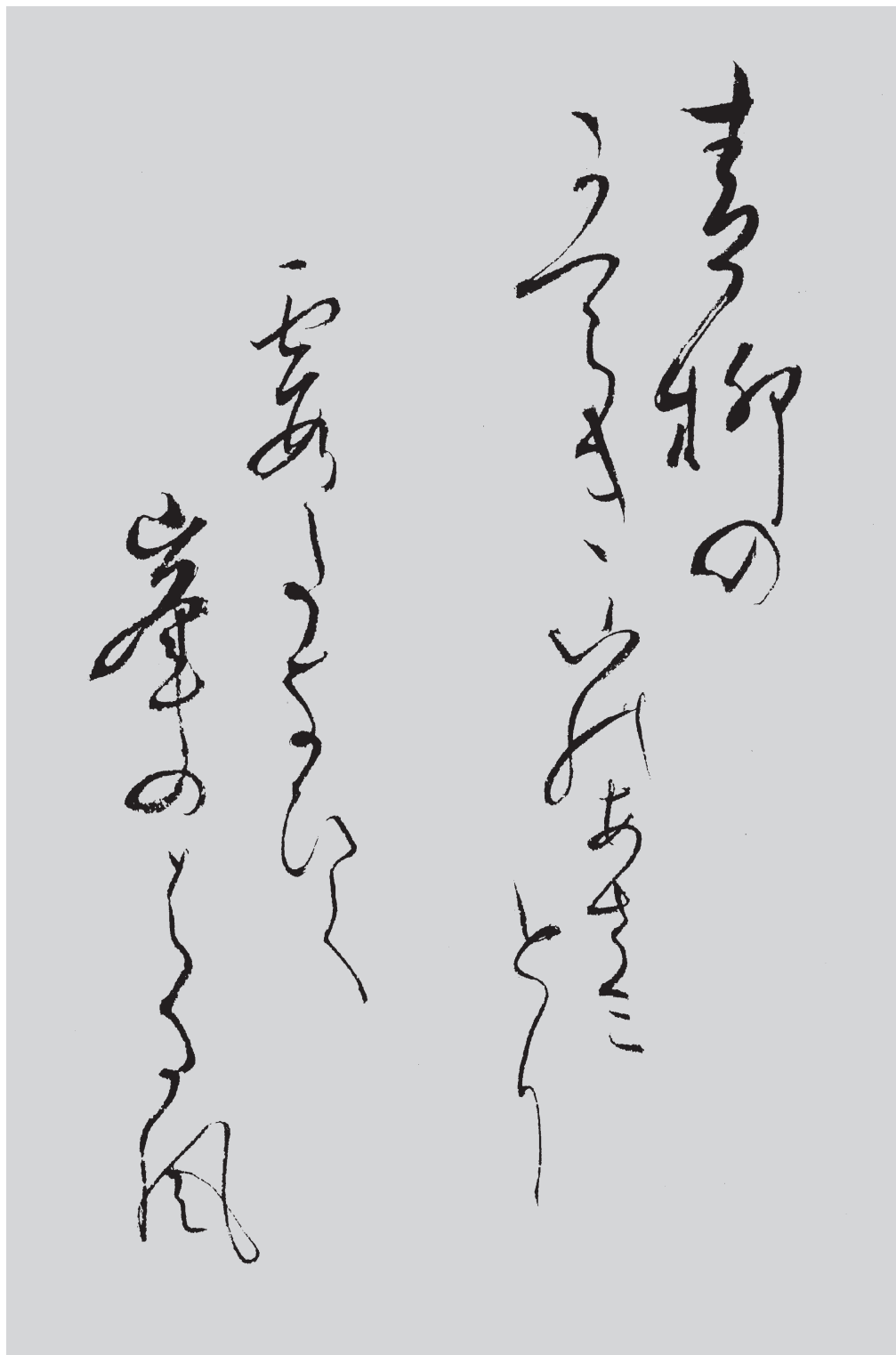
訳：吾が意志は山水の景色を探し楽しむことにある。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



高塚竹堂先生書

青柳のかつらぎ山のあさみどり霞たなびく峰のはる風(本居宣長)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

左祥

「雨段」タテ長、大きく

字幅、多たれ久し、四子連続

右下方へ「ス」的。「山」字幅とて大

きく、「者」風「細」静調、「風」動、大きく線は変化。

右祥、一行目、「五月」の倍以上の字幅の「柳」。

二行目、在余白へ長く字幅とりの「つ」。「能」

下中央より「あ」三「と」台下へ流し、「と」

の字は硬く、なぐぬよう伸びやか。

〇〇

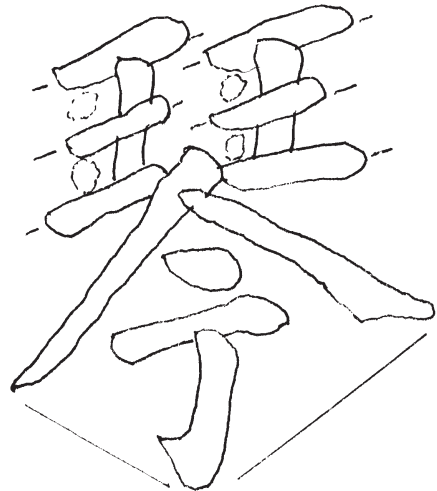
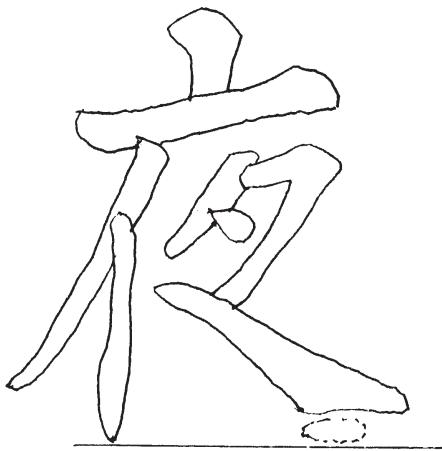
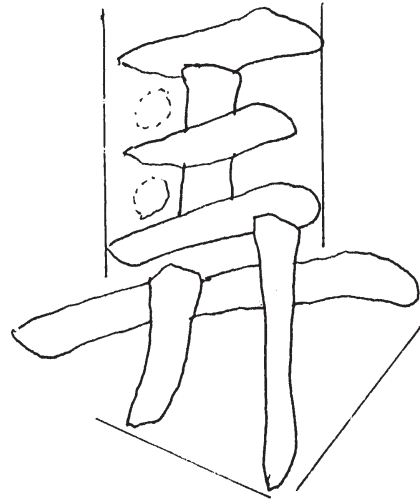
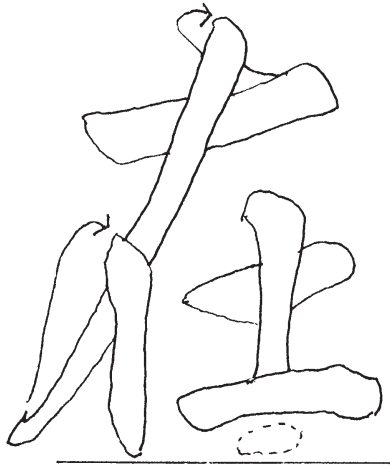
平岡華雪先生書

琴を弄すは宜しく夜に在るべし(宋之問)

弄琴宜
在夜

訳：琴をかなでるのは夜がよい。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



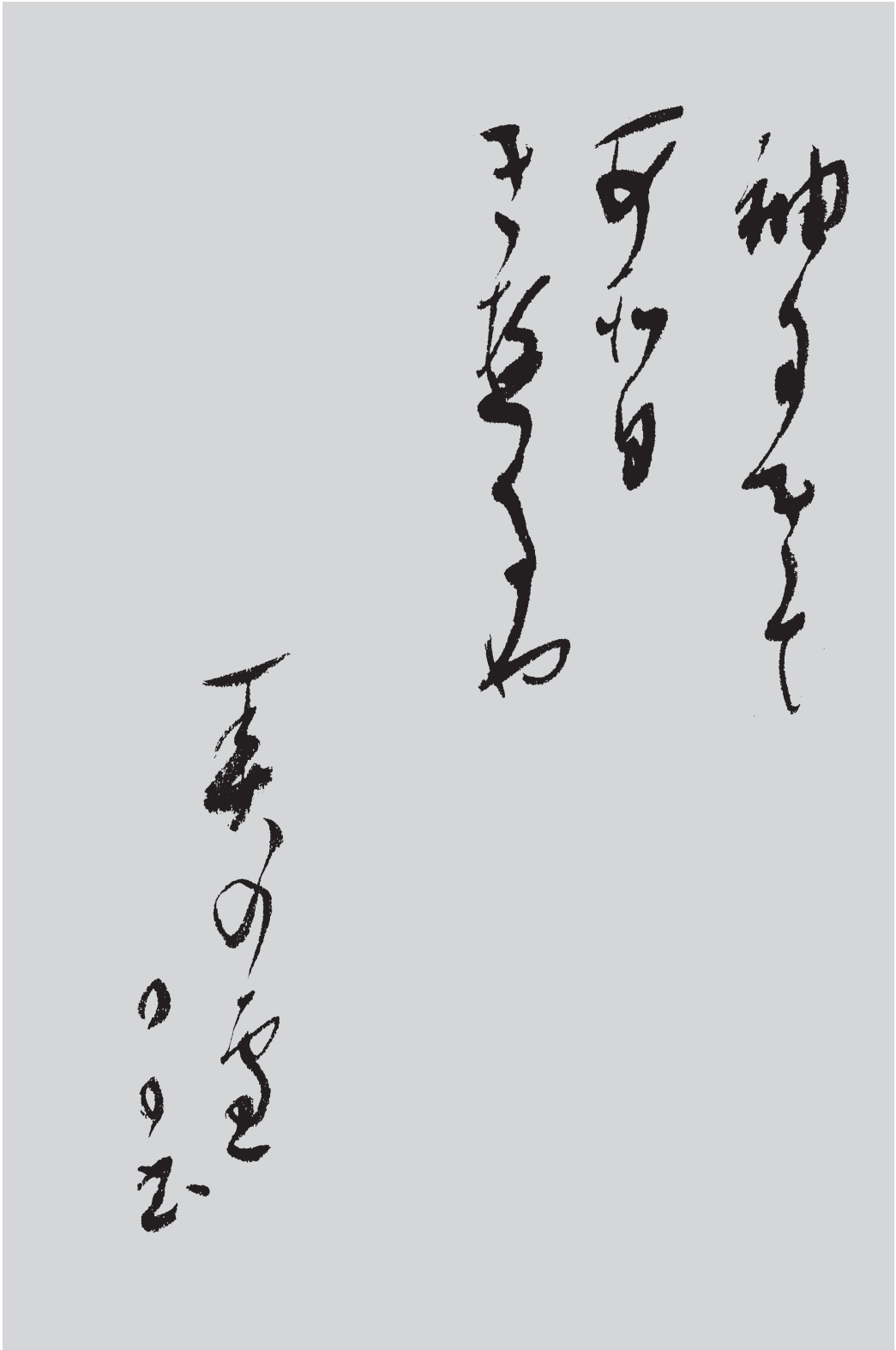
「弄」の「今」楷書では終筆は一画離す。その一画を点いたり、真下へ引いたり、右下へ向せよ。夜、一点二画の動かし方がいろいろな表情。一画目を離す、二画目を長く、三画目を少し寝かす……。

空っぽの手はの試みをー

冠大きく

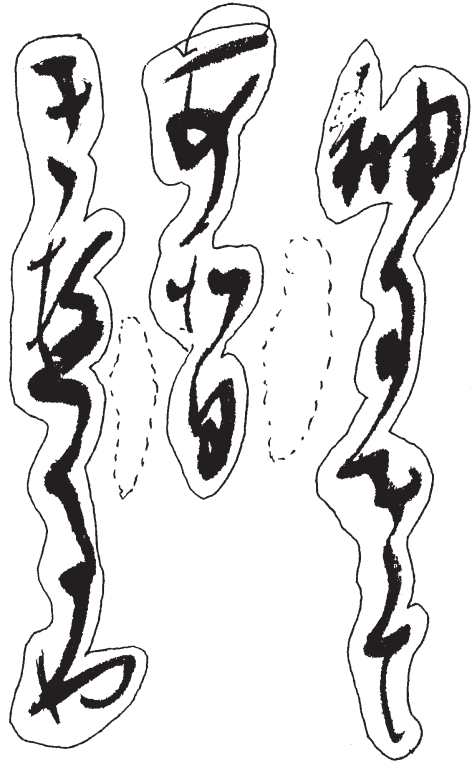
平岡華雪先生書

袖に来て遊び消ゆるや春の雪(虚子)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

とくかく筆を練習を—
 四行あろりの構成。そのままに
 表わされていたが、四行間の余白の大小
 に注目してほしい。筆雪先生の手法の一つ。
 行の伸縮リズムとして効果。四行が全連綿、特に
 初歩段階者は、筆を練習によって、暗字がひきまひ練習してほしい。
 なる、当該款はこの位置ということはない。単なる目字、余白との調和—。



—の—の—の—

戸張 丘邨 先生 書

五色慶雲開鳳尾 九重麗日繞龍鱗 (徐賞)
五色慶雲鳳尾を開き、九重の麗日竜鱗を遶る

又色慶雲開鳳尾九
重麗日繞龍鱗

丘邨 玉

訳：五彩のめでたい雲は鳳凰の尾を張り開き、九重に照るうらかな日は老松をめぐっている。

長澤 恵苑 先生 書

この里に手まりつきつ子供らと遊ぶ春日はくれずともよし (良寛)
古の里に手まり徒支つ、子供らとあ曾ふ春日盤久れずともよし

古の里に手まりつきつ子供らと遊ぶ春日はくれずともよし
あはれふ春はあはれすともよし

直美 玉

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

難波陽石先生担当
 せつこぶん
 石鼓文（紀元前5〜4世紀）

不顯大猷。乍遽乍隲。倬々皮導。遄我嗣邑。拑々其除。帥皮阪基。芟々其草。爲卅
 不顯なる大猷もて、原を作り隲を作る。倬々たる彼の導、我がせ治むる邑に過す。拑々として其れ
 除き、彼の阪基よりす。芟々として其れ草め、三十の「里を」為る。



△解説とポイント▽

漢字の伝来と日本語

- ・弥生時代の中期の古墳から篆書で書かれた「貨泉」（円形で角穴の貨幣。左下に文字をしるす）が発見されています。これは王莽の「新」の貨幣です。
- ・漢字が渡来する前に当然、ことば——日本語は存在していました。わが国において文字をうみだそうとする文化的土壌が整えられる前に、漢字が伝わってきたのであ

る。その漢字を使い、文章を読み書き、感情や思想を表現することに習熟していき

石鼓文原本

きます。しかしやがて、日本語特有の感情を表現しにくいことに気づき、漢字の形・音・義（意味）のうち義（意味）を無視し、形と音だけを使って日本語を表現する試みがなされました。これが漢字の意味を捨てた表音文字と言われる仮名の発明でした。この段階に

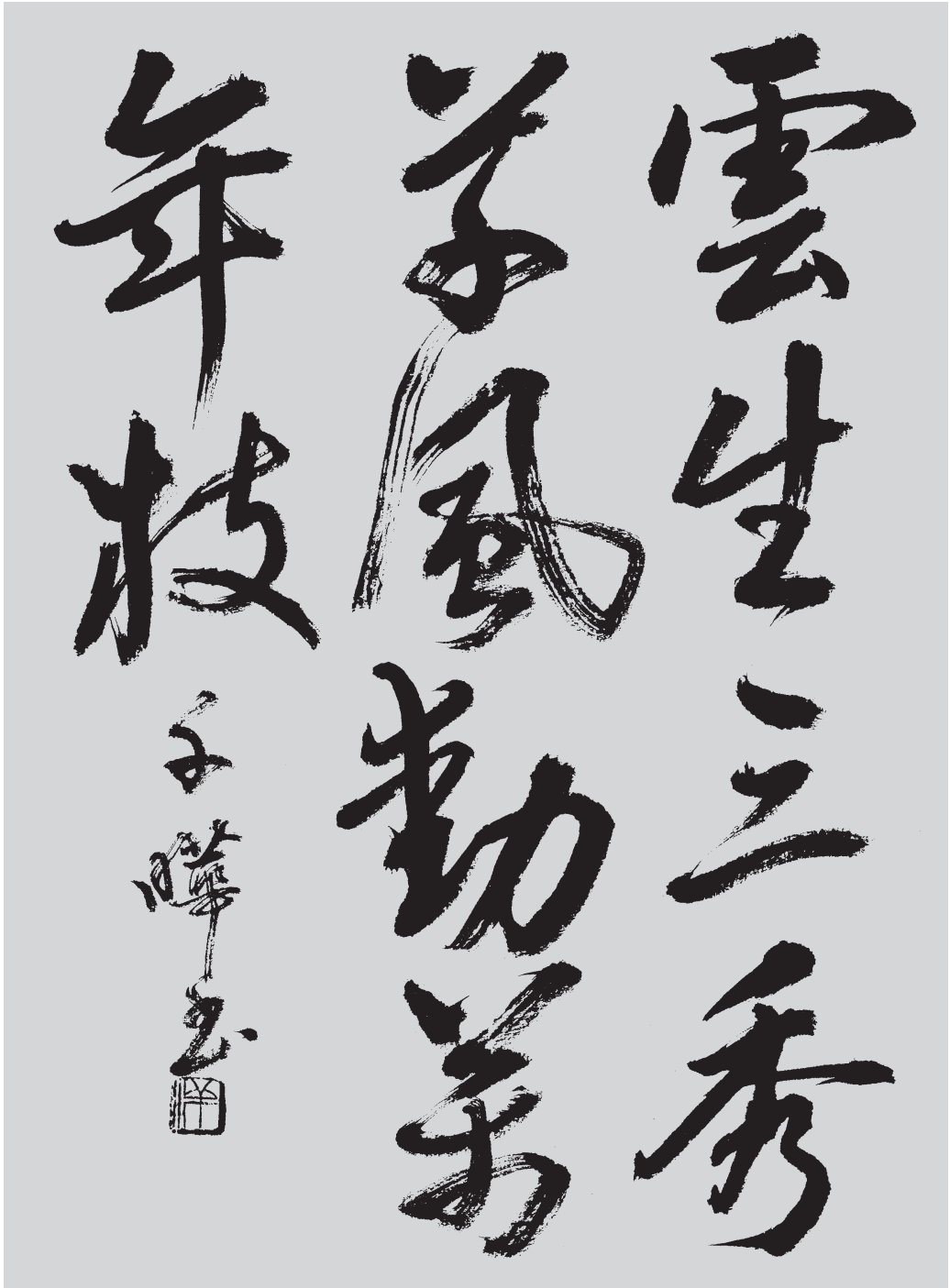


たるまでには長い苦闘の時間が必要でした。
 ・今回で石鼓文臨書講座は終了します。私自身改めて本を読んだりして勉強をする機会が得られ幸いでした。できるだけ初心者の方にもわかり易く心をかけましたが如何でしたでしょうか。書の臨書字習は費やされた紙の枚数にあるといわれています。何事にも言えることですが新しいことをしなければ、新しい発見やよるこびはないということです。皆様もいろいろな新しいことにチャレンジしてみてください。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

路川千曄先生書

雲生三秀草 風動萬年枝（陳廬）
雲は生ず三秀の草、風は動く萬年の枝。

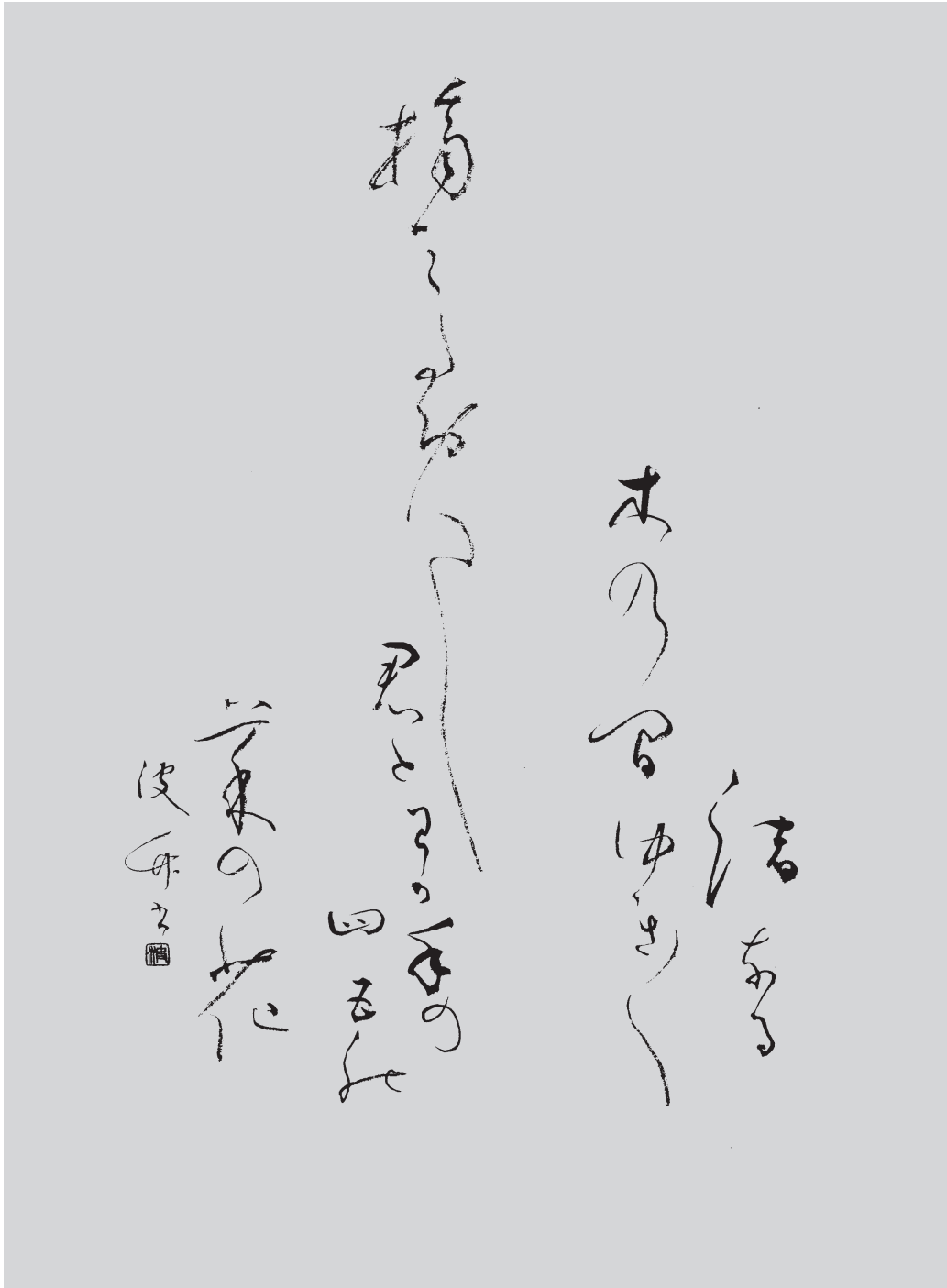


訳…雲は年に三たび秀いずる靈草に生じ、風は吹いて萬年の枝（青木）を動かすのである。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

喜 多 波 竹 先 生 書

渚なる木の間ゆきゆき摘みためし君とわが手の四五の菜の花 (若山牧水)
渚奈る木乃間ゆきく摘三多免し君と王可手の四五能菜の花



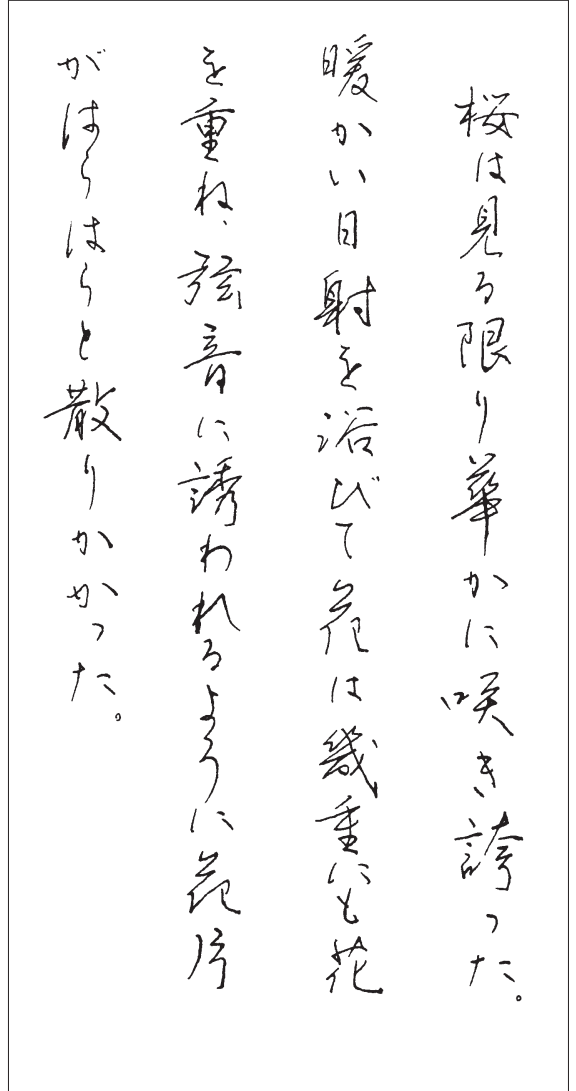
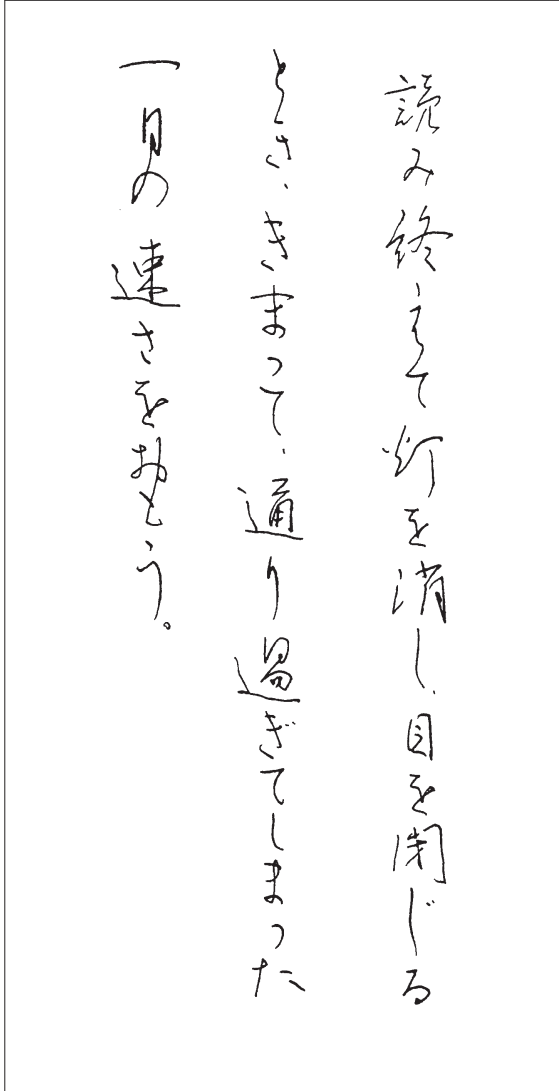
◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

石原春香先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

桜は見る限り華かに咲き誇った。暖かい日射を浴びて花は幾重にも花を重ね、弦音に誘われるように花片がはらはらと散りかかった。

「草の花」 福永武彦

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (4) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)。
- (5) 課題1 六〇〇円
- (6) 課題2 三〇〇円

課題1 石原春香先生
課題2 千三七〇〇八七

課題1 石原春香先生
課題2 千三七〇〇八七

高崎市菜間町三三四一二

課題2 (初段階以下)

読み終えて灯を消し、目を閉じる
とき、きまって、通り過ぎてしまっ
た一日の速さをおもう。

「日曜日の万年筆」 池波正太郎